HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭の辞
Author(s)	深瀬, 忠一
Citation	北大法学論集, 29(3-4)
Issue Date	1979-03-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16877
Type	other
Note	矢田俊隆の肖像あり
File Information	29(3-4).pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

巻頭の辞

矢田俊隆先生は、昭和五三年七月二三日に満六三歳の誕生日を迎えられたので、昭和五四年四月一日をもって停年退官される。ここにわれわれ一同、先生に対する深い敬意と心からの感謝の念をあらわすため、本誌特集号を同教授に献じたいと思う。

矢田先生は昭和一〇年東京大学文学部（西洋史学科）を御卒業になり、いくつかの旧制高校、新旧制大学の講師をなさった後、昭和二五年四月、乞われて、設立まもない北海道大学法経学部の教授としてむかえられ、やがて独立成った法学部の教授となられた。以来法学部、大学院、教養部において、西洋政治史を中心に御講義をされるとともに、御専門の研究に専念になり、本学部の研究水準を大いに高められた。その間、法学部長、評議員として、学部及び北大の管理運営においてもなみなみならぬ御努力をなさった。政治学関係教官のなかでは、教育・研究・行政の中心的存在であった。一時期教養部教官の間は、教養部改革問題に献身的な御努力もなさった。政治学会、西洋史学会に所属され、先生はいずれの学会においてもながく理事をなさり、両学会の発達に大いに寄与された。また、昨年法学部から独立したスラブ研究センターにおいては、スラブ研究施設としての創立以来、その研究と管理運営に尽力され、よき理解者として法学部とのよきパイプ役であられた。センターが今日あることに御貢献になった先生の御満足が察せられる。

先生は講義をなさるのに、むずかしい内容のものも、学生に理解しやすく具体的で興味を喚び起すようになさったし、講義の口調は流れるがごとくであった。先生のおだやかな人柄とあいまって名講義のほまれ高く、多くの学生を集めたことはむべなるかなである。若手研究者の養成にも力をいれられ、すぐれたお弟子をなん人も学界に送り出したこと、これも先生の大きな功績である。また、研究者としての先生の貢献は、停年に近づくまで一度も筆をおくこ

とをしなかったことからもくる。学部の長老的存在になられてからも、一貫して研究を続けられ、労作をつぎつぎと出版なさった。後掲田口助教授の論文および文献目録にみられるように、先生の研究対象は最初は一九世紀ドイツ政治史である。その後しだいに東ヨーロッパにうつり、先生はこれらの領域においてわが国で最もすぐれた研究の成果をあげておられる。精魂こめた研究は昭和五二年『ハプスブルグ帝国史研究』の大著となって結実した。先生の学問や研究成果の評価は専門家の手にゆだねるほかはないが、私のような門外漢からみても、データの把握の精確さ、大げささやけばけばしさがなく、むずかしいテーマも厖大複雑な諸要因をバランスを保って総合し、簡潔流麗の筆致をもってまとめ上げられていることを、見事と感ずる。東欧研究もそれ自体すぐれておられようが、それは西欧理解をも深めておられるにちがいない。

先生は文学部系の出身であり、友人もその関係に多いかもしれない。このため法学部的な雰囲気に必ずしもなじめない点もあったかと思われるが、先生の温和でこだわりのないお人柄が、いかに学部の雰囲気をおだやかなものにして下さったことであろうか。政治関係の教官とはしばしばグループで旅行もなさるとのことである。常に微笑をたやさない先生の人格が、学部内外で極めて貴重な役割を果してきたことはまちがいない。

最近、厳寒期には肩のあたりに神経痛性の痛みを訴えるようになられた。先生は退官後は、ながくお住みになった札幌を離れられるが、それも温暖の地に住まねばならないというこの事情のためとのこと、札幌を遠くお離れになることにはわれわれはもちろん、先生も、深いさびしさがおありになるにちがいない。だが、旅行がお好きな先生のこと、またよく当地にいらしていただけるものと思いたい。その折は、研究の面でわれわれをいっそう啓発下さるとともに、われわれの心をなごませ明るくして下さる自由な歓談の機会をお与え下されば、この上なく幸せである。

昭和五四年三月

北海道大学法学部長　深瀬忠一